

大学図書館における研究支援機能の構築
—東アジア研究情報資源提供の現況と課題—

東京大学附属図書館アジア研究図書館
上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL)
特任研究員 中尾 道子

1. アジア研究図書館計画と U-PARL (アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門)

東京大学は、漢籍、中国語文献、韓国・朝鮮語文献、あるいは旧植民地関係資料(朝鮮、台湾、旧満州などに関する本や資料)をはじめ、数多くのアジア研究資料を所蔵している。この大きな財産を活かし、さらに新たなコレクションを加え、アジア研究の一大拠点を築く、そのような構想から、新図書館計画の一つの柱として「アジア研究図書館」の設立が提起された。この構想の実現をアジア研究の専門家の立場から担うことを目的とし、附属図書館に属する研究組織として、2014 年 4 月に U-PARL (アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門/Uehiro Project for the Asian Research Library) が設置された。U-PARL は、改修工事完了後の総合図書館本館 4 階に設置される「アジア研究図書館」の開館(2020 年の予定)に向け、アジア研究や図書館研究を推し進めつつ、蔵書構築やフロアプランなどのほか、アジア関連資料のデジタル化やアジア研究普及のためのセミナー開催などを精力的に行っている。

詳しくは <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/>参照

U-PARLの活動



2. U-PARL による東アジア研究情報資源提供の現況

アジア研究図書館の蔵書の核となるコレクションの収集・公開及びデータベースやオンライン資料による研究環境の整備を行うと同時に、学内のデジタルアーカイブズ基盤構築事業の展開と緊密に連携し、多様なアジア資料の形態に応じた資料のデジタル化と情報の可視化を進めている。

①資料の収集と公開

東京大学の学統の中で構築されてきた研究資源の特質を生かし、関係の深い有力なアジア研究関連機関の蔵書との棲み分け、相互補完を目指すとともに、アジア研究緒分野に必須の基本資料が幅広く揃い着実に更新されていく環境をつくることを重視し、新規購入、寄贈資料の受入れ、学内の図書館・図書室の資料の統合の三方向から蔵書構築を進めている。

[アジア研究図書館開架フロアの収書方針 (案)]

・アジア研究に用いられる辞書（語学辞書、グロッサリー類）、事典、書誌、索引、目録、地図帳、年表等の参考図書（原則として禁帯出）

・参照頻度の高い研究書、研究入門書

・学史上重要な著作・資料（大学院生が研究を進める上で必ず参照すべき著作など）

*現在、本館3階に「アジア研究図書館蔵書コーナー」が設置され、収集した資料の一部が利用可能となっている。詳しくは <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/collection-temporary-use-2> 参照

②データベースの購入と利用情報の提供

U-PARL 購入東アジア関連データベース：『中国基本古籍庫』、『中華經典古籍庫』、『人民日報』、『申報』

・「アジア研究文献探索セミナー」を通してデータベースをよりよく利用するための実習も行っている。

③所蔵資料・購入資料のデジタル化とデジタル化研究

東アジアで刊行・書写された古典籍、石刻拓本、法帖の中から選定し、デジタルコレクションとして高精細デジタル画像を公開している。漢籍・碑帖拓本資料には、通常の図書目録では扱うことのできない項目が多数存在する。そこでU-PARLでは漢籍・碑帖拓本資料のメタデータ項目とその目録規則を独自に設定するとともに、目録規則のExcelファイル「漢籍・碑帖拓本資料メタデータ項目および目録規則」をウェブページで公開している。またこれと並行して画像公開システムに関する研究も行っている。

*2017年5月よりFlickrでJPEG画像と資料ごとのメタデータのExcelファイルを公開していたが、2018年9月からはIIIF (International Image Interoperability Framework の略称) 画像として公開している (Flickrでの公開は2019年3月末で終了)。これに伴い、U-PARLで公開する資料のライセンスを、総合図書館の提供する画像等の利用条件に合わせて、従来提供していたクリエイティブ・コモンズ・ライセンス「表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 (CC BY-NC-SA 4.0)」から「表示 4.0 国際 (CC BY)」に改めた。

詳しくは <http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/kanseki-hi-jo> 参照

3. 大学図書館における東アジア研究情報資源提供への課題

世界のトップレベルの研究図書館では、各研究分野の専門的知識を備えたサブジェクト・ライブラリアンが蔵書構築を担い、最先端の研究活動を支えている。U-PARL では、国内外の研究図書館との交流を通じて、アジア研究の専門的人材が図書館において果たすべき役割についても探求している。

[海外の研究図書館調査及びサブジェクト・ライブラリアン研究から見えてきた課題]

①欧米のサブジェクト・ライブラリアンからの日本の資料の電子化の遅れを懸念する声

中国や韓国で刊行されたジャーナルや図書はすでに大部分が電子化されていて便利であるが、日本はまだほとんどが紙の状態なので、すぐにオンラインでアクセスすることができない。

・日本でも近年、人文社会系分野の学術論文、データ等のオープン化につながる動きが進んではきているが、その多くは紀要や小規模の学会誌であり、大手の学術雑誌ではカバーされていないことが多い。J-Stage や機関リポジトリでの公開が増えつつあるが、学会等の役割やオープン化の担い方については解決すべき課題も多い。

②学位論文の剽窃チェックに伴う教員からの声

東京大学では、提出された博士学位請求論文の独創性・新規性・引用等に関する確認を合理的かつ迅速に行うため、平成 27 年 12 月 1 日以降に提出された学位請求論文(課程博士・論文博士)について剽窃チェックソフトウェア (iThenticate) による事前の確認を行っているが、少なくとも東アジアを主題として日本語で書かれた人文科学の論文には、まったく何の役にも立っていない。

・中国研究も朝鮮研究も現地の(現地で刊行される)研究情報源へのアクセスは容易になったが、一方で日本における東アジア研究へのアクセスは依然困難な状態が続いており、日本の東アジア研究者の学術論文の被引用数向上の妨げにもなっている。また、このことは剽窃しても、されていても気付かれ難い等、研究不正の要因ともなり、オープンサイエンス、とくに学術論文のオープンアクセスの遅れが日本における東アジア研究(とくに人文社会系分野)に及ぼす影響は計り知れない。

研究支援としての情報リテラシー教育の重要性

図書・資料のデジタル化が急速に進展し、オープンサイエンス化が進む等、日々目まぐるしく変化する情報環境の中で求められる大学図書館の研究支援機能とは？

・学位論文の執筆やジャーナルへの投稿等、研究で必要とされる情報スキルにも対応し得る情報リテラシー教育の担い手の配置。